

一橋論叢第八十六卷総目次

論 説

社会科学のための共分散分析の電算機プログラム	磯江由美子	一	一頁	通頁
商法に於ける状況報告会計の展開	安藤英義	一	六	一
——出資者保護の一系譜——				
寄席芸人としてのヴェーデキント	田 辺 秀 樹	一	三	三
資料としての法史料について	植 田 兼 義	一	四	四
満州事変以後の三井財閥系企業の企業金融	坂 本 雅 子	一	七	七
好況局面とへ生産と消費の矛盾	由 井 敏 範	一	一〇	一〇
——商品過剰論の一バリエーションについて——				
発見されたアメリカ黒人	斎 藤 忠 利	二	一	一四
——「ハーレム・ルネサンス」の作家たち——				
組織とイノベーション	榊 原 清 則	二	一〇	一〇
——事例研究・超LSI技術研究組合——				
一九六〇年代の社会運動論	矢 澤 修 次 郎	二	三	一七

F  
16  
⑤

(131) 一橋論叢第八十六卷総目次

——北川隆吉氏の研究を中心として——			
主観的違法要素についての一考察	都築 廣巳	二	一四四
選挙権の本質と選挙原則	辻村みよ子	二	一七〇
アメリカ砂糖政策に関する一考察	永野 善子	二	一八〇
——独占形成後の海外原料糖輸入と国内砂糖生産の調整をめぐって——			
ヴァイツゼッカーの擄取概念	長浦 建司	二	一〇八
ウィリアム・コベットのブリストリ批判	杉山 忠平	三	一一
H・A・ルバーキンとその図書館	今井 義夫	三	二〇
——あるナロードニキ文献学者の生涯と思想——			
大正期経済学関係雑誌記事索引の比較研究	宮地 幹夫	三	四
統計情報ドキュメンテーションの方式	松田 芳郎	三	五
——理論モデルと日本における展開史——			
比較地誌におけるリッターの方法	竹内 啓一	三	七
『クレオニース』論	萩原 茂久	三	六
——恋愛と戦争——			
フランス労働組合運動の財政基盤	平井 和秀	三	二六
利子生み資本論と信用制度論	花田 功一	三	二七
資本理論における双対性	荒憲 治郎	四	一
中小漁業の労働市場に関する一考察	依光 正哲	四	六
——千葉県銚子市における実態調査を素材として——			

『マクベス』——人間判断について(2)	山田直道	四	五	四四九
銀行貸出市場の構造と貸出金利の「硬直性」	清水啓典	四	五	四四三
企業結合と配当可能利益	伊藤邦雄	四	六	四七九
保護領支配確立期のカンボジアの内水面漁業	菊池道樹	四	六	四九七
監査委員会制度に関する若干の問題点	土橋正	四	二五	四九七
——その構成員資格を中心として——				五三五
対米自動車輸出自主規制	小島清	五	一	五四三
——管理貿易化の危機——				
魔性の女神	宮下忠二	五	二	五三三
石炭液化の問題点	井出野栄吉	五	三	五八四
ミルの功利主義の構造	塩野谷祐一	五	五	六〇二
寛永本『西行物語』考	秋谷治	五	八	六三三
——『西行物語』原型を探る——				
スタグフレーションと労働者の地位	屋嘉宗彦	五	一〇三	六四五
株式会社と会社資本の自立化	松下優	五	一三	六六三
弁証法の根本諸法則と弁証法的カテゴリー	岩崎允胤	六	一	六八九
商品の色の役割	岩城良次郎	六	九	七〇七
商品学と広義の価値論	関恒義	六	三	七一九
所得分布曲線とエントロピー	片岡信二	六	四	七三六
科学・技術は人間に何をもたらしているか	岡山誠司	六	五	七五三

——人工物との相互作用を中心て——	片岡 寛	六	七〇
商品の多様化現象の中での品質と価格	片岡 寛	六	七〇
——エアコンを事例として——			
マルクスにおける使用価値概念の変遷	石崎悦史	六	七〇
——商品学における品質論との関連で——			

研究ノート

ブラーテン論争をめぐって	宮野悦義	一	一〇
英国におけるコーポレーション法の一般的採用	米山高生	一	一〇
——一八五五年「有限責任法」成立過程に関する一考察——			
カップの社会的費用論に関する覚書	寺西俊一	五	二九
ストロボスコープ型遠心顕微鏡	上坪英治	六	二七

年譜・著作目録

浅岡博教授略歴抄	六	二六	八四
浅岡博教授著作目録抄	六	二六	八六